聖書研究祈祷会　　2026 年 6 月 11 日
聖書：ヨハネの黙示録 7　2 章 18－17 節

ヨハネの黙示録が宛てられた小アジアの七つの教会の中で、今日は四つ目の教会である「ティアティラ教会」である。ティアティラ（現在のトルコのアクヒサル、前回のペルガモン《現在のペルガマ》から南東約85キロ）は、黙示録に登場する七つの教会の中で最も小さな町だったが、主から送られた手紙は最も長いものであった。この町は商業と工業の要衝であり、織物、皮革、青銅細工、パン焼きなど、多数の「同業組合」が強力な影響力を持っていた。使徒言行録 16 章に登場する、パウロの宣教を助けた紫布の商人リディアもこの町の出身。

当時の社会において、労働者が職を得て商売を成り立たせるためには、この「同業組合」への加入が実質的に義務付けられていた。しかし、組合の会合や宴会は、その職業の守護神（異教の神々）への礼拝と密接に結びついていて、偶像に献げた肉を食べることや、宴会の後に行われる性的な乱れ（不品行）への参加が求められていた。したがって、ティアティラのキリスト者たちは、「信仰の純潔を守って経済的な困窮に陥るか、それとも生活のために異教の習慣に妥協するか」という、非常に現実的で過酷な選択を日々迫られていた。これは 2 章と 3 章に出てくる教会に共通している状況だった。

18 節.「目は燃え盛る炎のようで、足はしんちゅうのように輝いている神の子が、次のように言われる。」
ここでイエス・キリストは「神の子」と紹介されている。黙示録の七つの手紙の中で「神の子」という称号が使われるのはここだけ。「燃え盛る炎のような目」は、人間の隠された動機や罪への妥協を心の奥底まで見通す、主イエス・キリストの全知と洞察力を表している。また
「しんちゅう（真鍮）」と訳されているギリシャ語「カルコリバノン（χαλκολιβάνω）」は、純度の高い輝く真鍮合金を指し、罪を踏み砕き、不純なものを焼き尽くすイエス・キリストの絶対的な聖潔と力強い裁きの権威を象徴している。

19 節.「わたしは、あなたの行い、愛、信仰、奉仕、忍耐を知っている。更に、あなたの近ごろの行いが、最初のころの行いにまさっていることも知っている。」
イエス・キリストはまず、彼らの素晴らしい成長を高く評価される。エフェソの教会が「初めのころの愛から離れた」と叱責されたのとは対照的に、ティアティラの教会は「愛（アガペー、ἀγάπη）」と「奉仕（ディアコニア、διακονία）」において右肩上がりに成長

し、活気に満ちた教会であった。その献身は本物であり、主はその歩みを見過ごすことなく称賛されている。

20 節.「しかし、あなたに対して言うべきことがある。あなたは、あのイゼベルという女のすることを大目に見ている。」

成長する教会の中に、致命的な霊的病理が潜んでいた。イエス・キリストは彼らが「イゼベル」という女性指導者の活動を「大目に見ている（容認している）」ことを激しく叱責する。旧約聖書（列王記上 16 章 31 節以下、列王記下）において、異教の王女イゼベルはイスラエルにバアル礼拝を持ち込み、国中を偶像崇拝に染めた。ティアティラにおけるイゼベルとは、自らを預言者と称し、「恵みによって救われているのだから、組合の宴会に参加して偶像の肉を食べ、みだらなことをしても霊的な問題はない」と説き、世俗との妥協を正当化する異端の指導者であったと思われる。

21-23 節.「わたしは悔い改める機会を与えたが、この女はみだらな行いを悔い改めようとしない。」

イエス・キリストは忍耐深く悔い改めの機会を与えられたが、彼女はそれを拒否した。そのため、キリストは彼女を「病の床」に伏せさせ、彼女に同調する者たち（この女の子共たち）をも「ひどい苦しみ」に遭わせ、死病によって打ち殺すと宣告する。

「この女の子供たち」とは、肉体的な子供のことではなく、彼女の偽りの教えに完全に染まり、霊的な姦淫（偶像崇拝と妥協）を実践している信奉者たちを指す。キリストは彼らを「打ち殺す」と語り、教会内に罪の妥協を放置することがいかに致命的であるかを示す。

「わたしが人の思いや判断を見通す者だということを悟るようになる」。

「思いや判断」は、ギリシャ語の直訳では「腎臓と心を探る者」。古代中東の思想において、「心」は知性や意志の座であり、「腎臓（内臓）」は感情や隠された動機、最も深い思いの座であると考えられていた。イエス・キリストは、人がどれほど「愛」や「寛容」というもっともらしい言葉で罪との妥協を覆い隠そうとしても、その心の奥底にある本当の動機（保身や欲望）を完全に見抜いておられるということを、全教会に知らしめようとされて。

24-25 節.「ティアティラの人たちの中にいて、この女の教えを受け入れず、サタンのいわゆる奥深い秘密を知らないあなたがたに言う。」

イゼベルたちは、異教の祭儀に参加して罪の深淵に触れることこそが、真の「奥深い秘密（深み）」を知る道であるとする、グノーシス主義的な教理を説いていたと考えられ

る。グノーシス主義的の思想の根本には「霊肉二元論」がある。これは「霊（精神）は永遠で神聖な善であり、肉体（物質）はこの世的で低俗な悪である」とする考え方である。この思想は一部の人々に、「肉体は元々悪であり滅びるものなのだから、肉体でどんな罪（性的不品行や偶像の神殿での宴会など）を犯しても、神聖な霊には一切影響を及ぼさない」という極端な放縦（道徳的堕落）を正当化する口実を与えた。ティアティラ教会にいたイゼベルと呼ばれる女預言者とその同調者たちは、まさにこの思想を取り入れ、異教の祭儀への参加や不品行を「キリスト者の自由」として推奨していたのである。

「サタンのいわゆる奥深い秘密」。当時の偽教師（イゼベルら）は、自分たちの教えを「神の深み（奥義）を知ることだ」と誇り、信者たちに「真の自由を得るためには、異教の祭儀の深淵まで経験し、それでも霊的に汚染されないことを自ら証明すべきだ」とそそのかしていたと考えられる。

しかしイエス・キリストは、彼らの教えを真っ向から否定する。彼らが自称する「神の深み」と呼ばれる秘密の知識は、実際には悪魔の巧妙な騙し事である「サタンの奥深い秘密」に過ぎないと暴露する。サタンは人間を罪の罠にはめるために、「自分たちだけが知っている特別な知識がある」という霊的な高慢さを利用する。イエス・キリストは、罪を正当化するような教えの奥底には、サタンの悪意ある策略が潜んでいると警告されたのである。

「別の重荷を負わせない」。イエス・キリストは、この偽りの教えに染まらなかった忠実な残りの信者たちに対し、「あなたがたに別の重荷（ギリシャ語：バロス）βάρος を負わせない」と宣言する。この「重荷（バロス）」という言葉は、使徒言行録 15 章 28 節のエルサレム会議の決定（異邦人信者に対し、偶像の供え物と不品行を避けること以外に新たに「あなたがたに重荷を負わせない」とした決定）と同じギリシャ語が使われている。つまり、キリストは「救われるために、何か新しい秘密の教えを学んだり、複雑な神秘的体験を経たりする必要は全くない。今のままで十分である」と宣言されている。

「わたしが行くときまで、今持っているものを固く守れ」。「固く守る（クラテーサテ κρατήσατε）」は、力強く握りしめ続けることを意味する。偽教師たちが新しい知識や自由をひけらかす中で、キリストの再臨の日まで、すでに与えられている福音の真理、純粋な信仰、そして神と隣人への愛を、決して手放すことなく真っ直ぐに握りしめ続けなさい、というイエス・キリストからの温かくも力強い励ましの言葉である。

26-29 節.「勝利を得る者に、わたしの業を終わりまで守り続ける者に、わたしは、諸国の民の上に立つ権威を授けよう。（中略）勝利を得る者に、わたしも明けの明星を与える。」

最後まで信仰の純潔を守り抜いた「勝利者」には、イエス・キリストから二つの約束が与えられている。一つは、「諸国の民の上に立つ権威（鉄の杖で治める権威）」。

組合の権力から締め出され、経済的弱者となった者たちが、終わりの日にはイエス・キリストと共に世界を治める王となる。

二つ目は、「明けの明星」が与えられる。「明けの明星」とは、キリストご自身のことを指す（黙示録 22 章 16 節「わたしは……、輝く明けの明星である」）。この世の富ではなく、主イエスご自身との永遠の完全な交わりが、最高の報いとして与えられる。

以上からわかるように、ティアティラの教会に向けられたイエス・キリストの言葉は、現代を生きるキリスト者に対し、愛と真理のバランスについて極めて重要なメッセージを語り掛けている。

現代の教会においても、愛や奉仕の活動が豊かであり、人々の間で親しい交わりが持たれていることは、主が称賛される素晴らしい美徳である。しかし、私たちが直面する最大の危機は、外からの迫害ではなく、社会で生き残るため、あるいは人間関係の摩擦を避けるために、「寛容」や「愛」を言い訳にして、神の言葉に反する妥協を大目に見てしまう「内なる崩壊」にある。

主が私たちに求めておられるのは、真理を欠いた盲目的な寛容でもなく、愛を忘れた冷酷な正統主義でもありません。「真理に裏打ちされた愛」と「罪を退ける聖なる決断」である。目先の利益やこの世の評価を失うことを恐れず、イエス・キリストが再び来られる日まで、今与えられている純粋な信仰を固く守り抜く。たとえこの世で不利益を被ったとしても、キリストはご自身という「明けの明星」を与え、永遠の勝利者として私たちを輝かせてくださるのである。